

『ウォルデン』(1854)の原点 *The Origin of Walden*

山田 正雄

YAMADA Masao

Abstract: Although negative views about the relationship between Thoreau and ancient Hindu thought might be seen, I tried to clarify that his experiences and recognitions described in his masterpiece *Walden* (1854) originated in Upanishad philosophy, i.e., *The Laws of Menu*. In fact, he was deeply impressed by *The Laws of Menu*, *Bhagavadgita*, *Vedas* in 1841 and 1842. And from July 4, 1845 to September 6, 1847, his practices such as living alone by the shore of Walden Pond, being lost in meditation for a long time in front of the door of his hut, and bathing in the pond in the early morning in the summer are based on the theory of *The Laws of Menu*. More precisely, it was at least two years after his publication of "The Scriptures of Nations" including *The Laws of Menu* in the *Dial* (1843) that he practiced those actions not only as religious ceremony but also as a search for the most valuable meaning in everyday life. Finally, through the influence of *The Laws of Menu*, his view of nature developed into religious belief and ideas of natural conservation.

Keywords: *The code of Menu*, Living alone in the woods, Study of Nature,
『マヌ法典』、 森の独居生活、 自然研究、

ヘンリー・ソローとウパニシャット哲学の影響関係の取り扱い方には諸説があるが、『ウォルデン』 *Walden or Life in the Woods* (1854) における彼の独居生活、瞑想、沐浴、米食の実践がウパニシャット哲学の影響を明らかに物語っている。本稿の主要目的は、『ウォルデン』の生活様式と思想の原点をウパニシャット哲学に辿り、第1にソローが『マヌ法典』を实践した要因と目的を明らかにし、第2に『マヌ法典』とソローの独居生活の緊密な関係を検討し、第3に自然との調和による自我探求と生態学的な認識に基づく自然環境

保護といった独居生活の意義を明らかにすることにある。

ソローが古代インドのパラモン思想に接近したのは、アメリカ 19 世紀前半の物質主義に束縛された同時代人の皮相的な生き方を人間の機械化と捉え、人間性喪失の社会現象を次のように指摘した。

比較的自由な我国においてさえ、殆どの人は単なる無知と誤解で、余計な苦勞と皮相的かつ粗雑な仕事に従事して人生の最も素晴らしい果実を摘み取ることができない。彼らの手は過度の労働のため無骨に震える。事実、労働する人は毎日の真の完全性のための余暇をもたない。…彼らは機械になる時間しかもたない。1)

労働舞踏病に取り憑かれた「大衆は静かな絶望の人生を送っている」2) と語って、彼は独自に価値ある人生の探求に向かった。

しかし、ソローが批判した 1840 年代の農家や商家は、不運なことに、アメリカの国土拡張と物質主義の影響を受けて、彼らの子弟が人生の新しい機会を求めて西部や都会へ出奔したために人手不足に陥っていた。事実、平均的な農家は多くの多様な農作物の栽培や家畜の飼育に忙殺されて過剰労働を要する逆境に陥っていた。Ruth Wheeler は、農民の困難な生活状態を次のように指摘している。

19 世紀には、ボストンが発展して港湾都市として栄えたので、商人は嘗々と事業を相続し、牝牛を買収して牧場へ送り、秋にはコンコードの野原で飼育し、最終的にはウォーター・タウンの家畜飼育場へ連れて行くか、コンコードで塩漬けビーフにした。

1810 年には、平均的な農民パトリック大佐は、馬 1 頭、雄牛 1 頭、雌牛 4 ~ 5 頭、豚 1 ~ 2 頭を飼育し、トモロコシを年間 50 ブシエルと干草を栽培していた。彼は 3 人の息子とで農牧をしていた。彼は林檎の木を数本育てて家庭用にラセット林檎とジュースを作り、干草、ジャガイモ、バター、チーズを販売した。50 年後、この農家は、市場向けのトモロコシ 300 ブシエル、林檎 600 バレル、多量のそら豆とスグリ、農作物の種子の生産、馬 3 頭、雌牛 3 頭を飼育し、夏期には 6 人の男子、冬期には 2 人の男子を雇っていた。農民は、食物に関して自給自足であり、ライ麦、トモロコシ、サイダー、林檎、ミルク、バター、燃料、羊毛、亜麻を生産していた。しかし、彼らが一体どのように生活していたかは不思議である。住民には土地だけが現金の収入源であった。3)

19 世紀初頭の農民人口は総人口の 80% であったが、1840 年には商工業の発展のために約 60% 強に減少した。4) 当時のコンコードの社会層には、牧師、教師、医師、法律家、

農民、青果商、雑貨商、大工、鍛冶屋、家具職人、樽桶職人、皮革職人、麦芽酒製造業者、鉛筆製造業者、採氷業者がいたが、近代化が波及して貯蓄銀行、公立及び私立学校、医院、法律事務所、裁判所、郵便局、図書館、ホテル、商店、綿織物工場、鉄道などの公共的な文化的な施設が出現した。5)

穏やかな小村から文明化に移行しつつあったコンコードで、ソローが生活改善を要すると語りかけた同時代人は、「日頃から不満を抱き、やたら自分の不運や時世の酷さを嘆いているだけで、まったく事態を改善しようとしなない大多数の人々であり、また自分の義務は果たしていると思いついでいるために、他人への不平不満を声高に語り、どんな慰めにも耳を貸さない人々であり、更にまた、あぶく銭を掻き集めてはみたが、その使い方も棄て方も分からずに自分用に金銀製の足枷^{あしかせ}を鍛えている外見は金持ちだがあらゆる階層の中でも酷く貧しい、あの階層の人々」6) であった。そのため、彼は「1つの中心点からいくらでも半径がひけるように、生き方はいくらでもある」7) と語った。結局、「人間は所有物に頸木^{くびき}で繋がれたまま、何とか前へ進もうと、喘いでいるように見える。...こうして我が陽気な蝶君は、蜘蛛の巣に捕えられて身動きがとれなくなってしまう」8) と物質主義に翻弄される同時代人の生き方を風刺的に語って、彼は独自の人生に向かう態度を次のように表明した。

思考や行動の様式は、いかに旧来のものであろうと、証拠なしに信じることはできない。...昔の人には昔の、今の人には今のやり方がある。...最高の賢者でも、生きることによって絶対的価値あることを学びえたかどうかは、甚だ疑わしい。...私はこの地球上に30年ほど生きているが、年長の人から価値ある助言はおろか、真剣な助言1つ受けたことはなかった。彼らは適切なことを何も教えてくれなかったし、そうしたくてもできないのであろう。ここに人生という、私がまだ殆ど試みたことのない実験がある。9)

このように、人生を実験とみなしたソローは、何者からも自由かつ独立した生き方をするため、ウパニシャット哲学に基づいた独居生活の実践に向かい、究極的には自己改革と社会改革の達成を試みた。重要なことは、彼の生き方が物質主義への抵抗を示すだけでなく、独創的かつ深く生きた経験によって超絶主義思想に実体をもたらすことになるという事実である。

1840年代アメリカは西部への大移住の時期であったので、新規一転時き直しを図るため、毎日、何百、何千もの人々が住み慣れた土地を離れて新しい開拓地へ移動しつつあった。しかし、ソローは単に空間的移動よりも自分の生き方を変える必要があると悟ってコンコードに留まり、自分の生活を簡素化して超絶主義を体現するつもりでいた。¹⁰⁾ 他にも森に引き籠もる人がいたが、彼ほど人生を理想的かつ深く生きるという明確な目的をもって森の独居生活をした人は少ない。

この時代には超絶主義運動、宗派運動、教育改革、女権運動などの社会改革運動が試みられた。特に、超絶主義運動に関しては、リプリー(George Ripley)が1841年にボストン郊外のウェスト・ロクスヴェリに実験的な共同農場社会ブルック・ファームを創設した。また、オールコット(Bronson Alcott)とレイン(Charles Lane)が1843年にマサチューセッツ州ハーヴァードのプロスペクト丘で共同農場社会フルーツ・ランドを創設した。彼らは超絶主義者たちを誘ったが、ソローは両方とも辞退した。¹¹⁾ それは、人生とは個人で解決すべき問題であるとする彼の個人主義の立場に基づいていた。

このような状況下で、ソローが森の独居生活を始めた要因は、一連の身近な人々の悲劇的な死にあった。兄ジョンの破傷風による急死(1842年1月)、その1週間後のエマスの息子ウォルドーの猩紅熱による急死、翌年の学友C.S.ホイラーのドイツ諸大学で留学中の客死に直面して、彼は激しい精神的衝撃を受けて心身症に陥った。一方、ソロー自身が肺結核の疑いで死の強迫観念に取り憑かれていたため、彼が真剣に生きて自分の人生から学ぶことを自己省察したとしても不思議なことではない。

私が森へ行ったのは、慎重に生きて人生の本質的事実だけに直面して、人生が教えてくれることを学ぶことができるかどうか、また死ぬときになって自分が生きてこなかったことを後悔しないようにと願ったからである。私は人生でないものを生きたくはなかったし、生きることはそれほど大切なことである。また、必要でない限り、私は断念したくはなかった。私は深く生きて、人生のすべての髓を吸い尽くしたいと願った。¹²⁾

ソローが独居生活を実践した第1の目的は、上記の引用文が示すように、死ぬときに後悔しないように、人生の本質的事実だけを慎重に深く生きることにあった。第2の目的は、彼が敬愛した兄の追憶のエッセイ(後の『コンコード川とメリマック川での1週間』)を著

述することにあつたが、母親シンシア (Cynthia Dumber) が家計を支えるために自宅に下宿人を置いていたので、彼には読書と思索と著述のための静かな書斎を必要であつた。第3の目的は『ウォルデン』となる原稿を完成することにあつた。独居生活の当初に村人の暗示的な質問を受けた彼は、森の生活報告書を著述する靈感を受けた。従つて、「私が本書の大部分を書いたとき、どの民家からも1マイル離れたウォルデン池畔の森で独居生活をしていた」¹³⁾ と書いた。師匠エマスを凌ぐ作家になりたいというソローの文学的野心が『ウォルデン』の著述に駆り立てたことは容易に想像することができる。

ところで、ソローの独居生活の思想的源泉は、彼が学生時代に形成した簡素化の思想的萌芽に辿ることができる。この簡素化はチャニング (Edward Tyrrell Channing) 教授から1835年から1837年まで修辞学の訓練として提出を求められた課題テーマの1つに見られ、また聖書の教えと逆行して1週間に1日働いて後の6日間を休息すると豪語した学位授与式の討論会の原稿に含まれている。¹⁴⁾ 大学卒業後、彼はこの萌芽的思想を永続的に考察して独居生活と結びつけた。そして、ウォルデン池畔の独居生活における簡素化の実践は、彼に読書と思索と著述のための時間を捻出し、健康維持を考慮した合理的な生き方だけでなく、エマスンとは異なる独創的な超絶主義作家になるという夢の実現をもたらすことになる。

それでは、ソローが独居生活のモデルとヴィジョンをいつ、どこに見出し、それを簡素化とどのように関連づけたかについて検討しよう。ハーディング教授 (Walter Harding) によれば、ソローに独居生活の暗示を与えたのは、サンディ池畔の廃れた小屋でC.S.ホイラーと共に過ごした大学4年次の夏期休暇中の体験を想起させた、友人チャニング (Ellery Channing) から受け取った、「ウォルデンへ行って壮大な人生の計画を実行してはどうか」という1845年3月5日付けの手紙であつた。¹⁵⁾ しかし、事實はそうでない。ソローが独居生活を開始する直前の1845年3月初旬に暗示を受けたというハーディングの指摘は、時期的に無理があつて妥当ではない。その時期、彼はすでに独居生活の明確なヴィジョンをもち、実践することを決断して、エマスンの所有地を借りる手筈を整えていたと解釈すべきである。

ソローの独居生活の立案計画は、少なくとも、独居生活が開始される4年前の1841年

に遡って考えるのが適切である。エマスのヨーロッパ旅行中(1841-42)、ソローは下宿したエマス家の書斎でインド聖典『マヌ法典』や『ヴェーダ』や『バガヴァト・ギーター』を深く読み、とりわけバラモンの求道的な生活規範が規定された厳格な立法『マヌ法典』から深い感銘を受け、それが求道的な生き方を実践するのに適用できる絶好の入門書であるとみなしたことは、1841年9月1日の日記が明示している。

『マヌ法典』は個人の献身の入門書であり、非常に個人的かつ家庭的なものだが、近頃、居間や説教壇では語られないような公式的かつ普遍的な言葉である。それは他の何よりも我々の誠実を訓練する一般的なものである。16)

更に、翌日の日記に、彼は『マヌ法典』の崇高な文章に深い感銘を受けて、精神的かつ神秘的な哲学が内包されていることを記述している。

『マヌ法典』の崇高な文章は、肉体的・精神的な清浄化、犠牲、献身が人間の信仰の場所であった時代、現代のように迷信ではなかった時代へ我々を連れ戻してくれる。それらの文章には、現代には見られない高尚かつ純粋な献身を伴った神秘的かつ洗練された哲学が含まれている。

17)

ソローが日記に書いた「肉体的・精神的清浄化」、「犠牲」、「高尚かつ純粋な献身」の概念用語は、彼が後年に森の独居生活で実践を試みることになるヴィジョンであることは十分に推測できる。重要なことは、ソローが独居生活を開始する2年前に超絶主義者の機関誌『ダイアル』 号(1843年1月号)に『マヌ法典』 *The Code of Menu* を含む選集「諸民族の経典」*The Scriptures of Nations* を掲載したという事実である。従って、独居生活、簡素化、心身の清浄化、神などバラモンの求道的な生き方が詳述された『マヌ法典』がソローに深い精神的影響を与え、ウォルデン池畔の森の独居生活の具体的なヴィジョンをもたらしたことは、紛れもない事実である。

ソローが『ダイアル』に掲載した『マヌ法典』は、習慣、中庸、清浄化と犠牲、教義、報いと罰、国王、女性と結婚、バラモン、神、献身について記述され、太古の「習慣」を示す超絶的な法とその法の根源がウパニシャット哲学の根本教義としての聖典『ヴェーダ』に基づく道徳的行為の実践について説かれている。

「清浄化と犠牲」では、バラモンは沐浴と真理による心身の清浄化だけでなく、至高の魂を探求することによって神の本質に到達することが説かれている。

身体は水で清浄化され、心は真理によって純化され、活力ある精神は神学と献身によって、理解は明晰な知識によって得られる。一切の存在における至高の魂を、また至高の魂における一切の存在を等しく知覚するとき、彼は神の魂に自分の魂を据えることによって犠牲にし、唯一神の本質に到達して、彼は自身の輝きによって輝く。(18)

「報いと罰」では、人間は善によって神性、悪によって獣性の状態になるという魂の在り方を因果応報、言わば道徳的行為として魂自体が知ると説かれている。

ああ、友よ、徳に対するあの至高の魂よ、それは汝が最も信ずるものであり、汝自身と同一のものであり、永遠に汝の胸中に宿り、汝の善悪について一切を知る監督者である。魂は、善を授けられると、常に神性の状態に至り、人間の状態で、志のある感情で満たされると、それらの魂は獣性という闇を貫く。(19)

「バラモン」では、森の独居生活で孤独に瞑想することによって、僧は一切の生物が完璧な存在であることを認識して至高の魂(神)だけに集中するとき、梵我一如を知覚して精神的な解放を得ることが詳述されている。

バラモンは天界に生まれ、宗教と市民の義務としての法典を護るために選任された万物の長である。バラモンにある孤独な場所で、孤独に魂の神聖な本質を常に瞑想させよ。瞑想によって、彼は幸福に至るからである。ある家族の父が自分の筋肉の締めりなさ、白髪になるのが分かり、彼が孫を見るとき、彼に森の中に避難所を探し求めさせよ。彼自身の至福のために独居させよ。孤独の人の幸福を観察し、彼が見棄てるのではなく、見棄てられるのでもなく、彼に独居生活をさせよ。心をしっかりもたせよ。神を知るために研究させ、神だけに集中させよ。粗末な衣服、完全な孤独、すべての生物に対する心の平静、これらが解放されたバラモンの特徴である。この世から完全に隠遁し、彼の魂以外の仲間もなしに、彼に来世の至福を探し求めながら、現世で生きさせよ。心全体を用いて、神秘的かつ分割できない至高の精神の本質、極端に高度あるいは低いものでも、すべての生物が完璧な存在であることを内省させよ。このように、徐々に現世のすべての附着物を棄て、名誉、不名誉のような反対物に無関心になるので、彼は神の本質に吸収されている。(20)

ソローが『マヌ法典』における「バラモン」からウォルデン池畔の森の独居生活に靈感を受けていることは、もはや疑問の余地もない。そして、「神」において、バラモンが独居生活中に瞑想して考察すべき対象は、すべての自然と神聖な例のうちに存在する目に見えるものと見えないものであり、万物に存在する至高の魂を自己の魂のうちに知覚するとき、

神に吸収されることが説かれている。

あらゆるバラモンに一切の自然、神聖な霊のうちに存在している目に見えるものと見えないものについて考察させよ。神聖な霊のうちに存在している無限の宇宙を瞑想するとき、彼が探求に没頭できるようにするためである。このように、自分の魂のうちに万物に存在する至高の魂を知覚する人は、それら一切に対して平静を得る。そして、最終的に全能の精神でさえ、最高の本質のうちに吸収されるであろう。21)

ソローがウォルデン池畔の森で独居生活を実践したこと、半日中あるいは1日中玄関先で孤独に瞑想したこと、夏の早朝にウォルデン池で沐浴したこと、米を食したという事実は、彼が『マヌ法典』から独居生活の靈感を受け、バラモンの求道的な生き方をモデルとし、簡素化、精神の清浄化、孤独な瞑想によって自然と神を探求するというヴィジョンを抱き、実践に移したことを明らかに物語っている。22) そして、彼が独居生活のために土地を探して農夫フリントと交渉を開始したのは、『ダイアル』に選集「諸民族の経典」として『マヌ法典』を発表した1843年1月以後のことであった。最終的に、彼はエマスン所有のウォルデン池畔の土地の1画を借用して独居生活に漕ぎ着けた。

ソローは森の独居生活で自然と神を探求して体験した神秘的合一の意識状態を第5章「孤独」で忘我の境地として次のように表現した。

快い夕方で、全身が一つの感覚器官になり、すべての毛穴から歓びを吸収している。不思議な解放感を覚えながら、行き来している。曇り空で風も吹いて肌寒いほどだが、特別に心引かれるものは何もないのに、シャツ一枚になって小石の多い池畔を歩いていると、自然を構成するすべての元素が普段と違って親しみ深く思われる。…私はハンノキやポプラの葉との共感で息が詰まりそうだ。だが、この池と同様に、私の平静な心は波立つことはあっても、掻き乱されることはない。23)

自然と調和した忘我の境地を体験して、ソローはそれを「身体的な統一感」、「不思議な解放感」、「周辺の樹木との共感」、「すべての毛穴から歓びを吸収する」と表現した。彼は瞑想による直観的な悟り、言わば梵我一如の境地を内省して、「神は人が神に思慮深く接近す

るのを好む。…人が神に接近するのは、忘我によってのみである。…インドの哲学者たちが禁じられたテーマに接近し、彼らの議論に伴う温和と静謐は見事である」²⁴⁾と1850年5月12日の日記に述懐した。

直観的な神認識の体験以後、ソローは神認識する意識に関して、二重の思考様式という認識方法を次のように説いた。

我々は思索に耽るとき、健全な意味で我を忘れることができる。頭脳を意識的に働かせることによって、行為と行為の結果から離れて立つことができる。すると善も悪も一切のものが、奔流のように我々の傍らを通り過ぎていく。我々は「自然の中にそっくり取り込まれているわけではない。私は流れに漂う流木にもなれるし、空からそれを見下ろすインドラにもなれる。私は劇場の出し物に感動するかもしれないが、その一方で、最も自分に関係のありそうな現実の出来事には感動しないかもしれない。私は、自分を人間的存在として知っているにすぎない。言わば思考と感情の舞台として。また、私には他人だけでなく自分自身からも離れて立つことができるような、二重の思考様式が存在することも意識している。私がどれほど強烈な経験をしようと、自己の内部には、あたかも経験を共有せずただ観察しているだけの見物人といった部分があり、それが批判の目を向けているのを感じる。その部分は他人ではないが、とはいえ私自身でもない。²⁵⁾

また、1850年5月6日の日記に、ソローは自然認識に関して、人間の精神を道徳的・知的な健康を維持するためには瞑想による自然との不断の直接交感が必要不可欠であると述懐した。

自然との不断の交感と自然現象を沈思黙考することは、道徳的、知的な健康にとって、どれほど重要なことか！学校や仕事の訓練では、精神をそのような平穏に変えることはできない。哲学者は自然現象を瞑想するときのように、人間的な出来事に大いに距離をおいて沈思黙考する。²⁶⁾

更にまた、ソローは自然との直接交感による神認識が社会的、実際の訓練ではなく精神的訓練、言わば認識することであると1851年5月12日の日記に書いた。彼が説く認識方法は、哲学に用いる西洋的な推理推論ではなく、瞑想による直観的な東洋的な認識である。

人間は純粹、肉体的、精神的、道徳的なチャンネルが開くと、直ちに神へと流れ込む。インド人の美德に関して言えば、それは精神的な訓練であって、社会的、実際のなものではない。それは認識することであって、実行することではない。²⁷⁾

実在に関して、ソローは現実と幻想の関係が社会では正反対に解釈されていることを指摘した後、実在の認識について次のように説いた。

実在が架空のものとされる一方で、虚偽と迷妄が確固たる真理としてもてはやされている。もし人間が実在の世界だけをしっかりと観察し、迷妄に陥らないようにすれば、人生は 我々の知っているものに喩えると 御伽噺やアラビアンナイトのようになるだろう。…急がず懸命に生きてゆけば、偉大で価値あるものだけが永遠の絶対的存在であり、卑小な不安や快樂は実在の陰にすぎないことが我々には分かる。実在するものは、常に心楽しく崇高である。(28)

「偉大で価値あるものだけが永遠の絶対的存在であり、卑小な不安や快樂は実在の陰にすぎないことが我々には分かる。実在は常に心楽しく崇高である」のだが、同時代人は自分の魂が崇高な存在であることに気づいていない、とソローは説いた。

インドの哲学者は、続けて述べている。それが置かれた環境によって自分の素性を取り違えてしまい、聖なる師が現われて真相を明らかにするまで、自分が梵天(ブラーマ)であることを悟らないのだ。」(29)

ソローの究極的な人生観は、刹那的な時間と生きる空間としての「今ここに」存在するという概念用語に凝縮されている。我々は実在世界に身を浸すことによって崇高なものの存在を認識することで、我々の思索の対象が実在世界であると表明した。

永遠の時間には、確かに崇高なものがある。だが、時間や場所や機会は、すべて今ここにあるのだ。神自身も今この瞬間、栄光の頂点に達している。…従って、我々は、自分を取巻く実在の世界を絶えず内部に浸透させ、そこに身を浸すことによるのみ、崇高にして気高いものを理解することができる。宇宙はいつでも素直に我々の思索に応えてくれる。(30)

ウパニシャット哲学の知識をそのまま受容して自我探求を目指すソローにとって、自然界は人間研究のための必然的な存在であった。そして、人生を「今ここに」という時間と空間に凝縮でき、実在世界に身を浸すことによる崇高で気高いものを認識することの重要性を主張した。

最終的に、「生であろうと死であろうと、我々が求めるものは、実在だけである」(31) と語ったソローが『マヌ法典』によって森の独居生活とそのヴィジョンだけでなく、東洋的な認識に基づいた『ウォルデン』の思想的深化を達成したことは明白な事実である。

ソローが独居生活中に池の現象に心を引かれたのは、採氷業者チューダー (Frederic Tudor) がボストンから連れてきた多数のアイランド人労働者の氷切り出し作業を眺めていた 1847 年 2 月のことであった。毎年冬になると、チューダーはウォルデン池の氷を切り出してニュー・オーリンズからカルカットまで船で輸送して莫大な利益を上げていた。ソローはこの採氷業を池や森を破壊しない有益なビジネスとみなし、ウォルデン池の周囲、面積を測量し、水深、水温、水位、水質を観測し、他の池や河川や泉の比較観察をして日付や図表を習慣的に記録するようになった。そして、彼はチューダーから暗示を受けてウォルデン池畔に生息する哺乳類、鳥類、植物の他に、魚類、爬虫類、昆虫を観察する湖沼学的研究を始めた。結局、彼は池や河川とそこに生息する生物との関係の考察を発展させることになる。

しかし、ソローが自然研究を実践した動機は、自然界の实在探求を目指すウパニシャット哲学のような原始自然宗教に基づいた世界観と無縁ではない。たとえば、彼が『ウォルデン』第 5 章「孤独」で「我々は、自分を取巻く実在の世界を絶えず内部に浸透させ、そこに身を浸すことによってのみ、崇高にして気高いものを理解することができる。宇宙はいつでも素直に我々の思索に応えてくれる」³²⁾ と説いたことと、『マヌ法典』の「バラモン」で記述された「心全体を用いて、神秘的かつ分割できない至高の精神の本質、極端に高度あるいは低いものでも、一切の生物が完璧な存在であることを内省させよ」という表現だけでなく、「神」で記述された「バラモンに一切の自然、神聖な霊のうちに存在している目に見えるものと見えないものについて考察させよ」という汎神論的自然観には強い思想的類縁性がある。従って、ソローの科学的事実を探る自然研究の傾向は、『マヌ法典』から受けた強い思想的影響であるとみなすべきである。

ソローは池の面積・水深・水位・水質などの測量と観測だけでなく、池周辺に生息する昆虫類、魚類、鳥類、水生植物などを観察する湖沼学的研究から、哺乳類、爬虫類、植物、気候の研究分野まで拡大して生態学的研究へと発展させた。彼は池と魚や昆虫の関係を観察し、自然と生物の連鎖性に注目して、自然界における個別的な生命の営みと個別の生物間には緊密な相関性があることを認識した。換言すれば、彼は自然界には循環する連鎖性、言わば一つの完全な存在としての生態系を認識していたことは、次のような象徴的表現が明示している。

丘の上から、どこで魚がはねても大抵目に入る。カワマスに白シャイナーにしる、この滑らかな水面に浮かぶ虫を一匹でも捕らえようとすれば、池全体の平衡をかき乱さずにはおかないからだ。33)

他方、ソローはウォルデン池畔の森の所有者ときこりによる樹木の伐採を嘆き、自然環境が破壊されている状況を憂慮して次のように語った。

ただ、私がああ岸辺を去ってから、木こりたちは更に酷く森を荒廃させてしまったので、森の小道を辿りながら、木の間隠れに池の景観を楽しむことなど、もう当分は期待できなくなった。小鳥たちの森が切り倒されているというのに、彼らが囀ることをどうして望めようか。34)

更に、彼は農夫フリントがサンディ池を独占して池の名称まで彼自身の名前をつけたことだけでなく、隣人たちがウォルデン池の水をパイプでひいて独占しようとするのを非難した。更にまた、ソローは物質文明の象徴である鉄道がウォルデン池畔の自然環境に打撃を与えたことを次のように告発した。

今では池の底の木の幹も、あの古い丸太のカヌーも、鬱蒼と繁る周囲の森もなくなってしまい、この池の所在さえ知らない村人たちは、そこへ行って泳いだり水を飲んだりする代わりに、少なくともガンジス川に匹敵するほど神聖な水を村までパイプでひき、その水で皿を洗おうと企んでいるのだ！ウォルデンを我が物にしようというのだ！……耳をつんざく嘶きを町中に響かせるあの悪魔のような鉄の馬は、ボイリング・スプリングの水を前足で濁らせてしまった。ウォルデン池畔の森の若葉をすっかり食い荒らしてしまったのも奴だ。35)

従って、ソローの生態学的研究は、「自然界のすべての生物が平等の関係かつ完璧な実在である」という『マヌ法典』の汎神論的自然観と密接に関連し、自己の魂を実在世界あるいは普遍的な魂(神)に身を浸し、それを吸収することによって崇高なものを直観的に洞察して忘我の境地に至るという経験から生じた信念、言わば原始宗教的自然観に基づいたものと解釈すべきである。彼が実践した独居生活は、『マヌ法典』の強い影響が反映し、そこに『ウォルデン』の原点がある。

ソローは古今東西の雑多な思想から自分に適した思想を摂取した折衷主義者であったため、『ウォルデン』には池畔の独居生活で実践した『マヌ法典』の強い思想的影響が流れ込んでいる。そして、彼が超絶主義思想に実体を与え、思想的深化を達成したのは、この『マヌ法典』によるところが大きいと言わねばならない。

『ウォルデン』の原点は、ソローが森の独居生活で自我探求と自然探求を実践に移した『マヌ法典』から靈感を受け、バラモンのような求道的な生き方を実践して自我を探求し、博物学的知識を用いて湖沼学研究から生態学的研究に発展させて、すべての生物との共存という自然環境保護の立場にいたった。それは人間が自然界における一切の生物に思いを致すこと、自然との共生を重視する思想的立場である。ソローの考え方は、天然資源保護および自然環境保護という点で、後世のジョン・ミュア(John Muir)に道を開いた。そして、ソローのウォルデン池畔における独居生活には、人生を深く生きることと、21世紀に生きる我々が直面している地球温暖化と気候変動などの問題解決のために有益な示唆を与えてくれるという意味で現代的意義がある。

NOTES

- 1) Henry David Thoreau, *Writings of Henry David Thoreau*, Vol. , AMS Press, 1968, 6 (以 W , と略す)
- 2) Ibid, , 8
- 3) Ruth R. Wheeler, *CONCORD, Climate for Freedom*, Concord Antiquarian Society, 1967, 140
- 4) Jack Larkin, *The Reshaping of Everyday Life 1790-1840*, Harper Perennial, 1989, 15-16
- 5) *CONCORD, Climate for Freedom*, 140
- 6) W , 17-18
- 7) Ibid, 12
- 8) Ibid, 73
- 9) Ibid, 9-10
- 10) Walter Harding, *The Days of Henry David Thoreau*, Princeton University Press, 1982, 188
- 11) Ibid, 127-128
- 12) op. cit, W , 100-101
- 13) W , 3

- 14) Henry David Thoreau, *Early Essays and Miscellanies of HDT*, ed. Joseph J. Moldenhauer and Edwin Moser, Princeton University Press, 1975, 129-139
- 15) *The Days of HDT*, Harding
- 16) Henry David Thoreau, *Journal* ,279(以下 *J* と略す)
- 17) *Ibid*, 280
- 18) Henry David Thoreau, *Early Essays and Miscellanies of HDT*, 130
- 19) *Ibid*, 132
- 20) *Ibid*, 134-137
- 21) *Ibid* , 138-139
- 22) *W* , 143
- 23) *Ibid*,144
- 24) *W* , *J* ,3
- 25) *W* , 149-50
- 26) *W* ,*J* ,193
- 27) *Ibid*, 4
- 28) *W* ,106
- 29) *Ibid*,107
- 30) *Ibid*,107-8
- 31) *Ibid*,109
- 32) *Ibid*,107-8
- 33) *Ibid*, 208
- 34) *Ibid*, 213
- 35) *Ibid*, 213 - 214